

「エレクトリアン・  
ジョーは生きてい  
る。」

山田 章太郎

## 【あらすじ】

1977年に作られたヒーローアニメ、「エレクトリアン・ジョー」の制作現場は最悪だった。スタッフは仕事をほっぽり出してボーリングに行ったり、嘔んだセリフにOKテイクを出したりと結果低品質なアニメが完成した。

主演を演じた泉幸代とラスボス役を演じた泉健太郎は同じ劇団の団員で、このアニメの声優の抜擢に心を躍らせていたものの、この体たらくに呆れるが、俺たちだけは「エレクトリアン・ジョー」を真っすぐ愛し続けようと誓う。

そして現代。健太郎と結婚した幸代はある日、エレクトリアン・ジョーの曲を流す若者を発見する。何故今更と戸惑う幸代の前に動画サイトでアニメを中心としたサブカル評論をしている太田という人物が現れる。

太田曰く「エレクトリアン・ジョー」はネットの普及で「カルトアニメ」として脚光を浴びていると聞かされる。

そして、太田の生配信である「カルトアニメ」の主演として生放送に出たことをきっかけに幸代はセカンドライフとも呼べるようなほどのメディア露出を果たす。しかし自分の持つまっすぐな「ヒーロー番組」としての「エレクトリアン・ジョー」と世間が持つ「カルトアニメ」としての「エレクトリアン・ジョー」のギャップに苦しみ続ける。

そうした日々を過ごす中あるテレビ局のプロデューサーから「エレクトリアン・ジョー」のリメイクアニメ化の計画が進んでいることが判明する。幸代はオーディションを受けることにするが、そのリメイクアニメの内容は「カルトアニメ」としてのジョーのファンに寄り添ったものだった。果たして幸代の決断とは。「作品」が「生きている」とはどういうことなのか。

登場人物

泉 幸代（65）主婦。アニメ「エレクトリ

アン・ジョー」の主演

西野幸代（18）泉幸代の旧姓。

泉健太郎（20）（67）幸代の夫。

太田忠司（9）（57）男 アニメ評論家

小森真一（45）男 コムプロデューサー

屋敷つかさ（26）女 声優

河合巧（50）音響監督

スタッフ ▼

客 ▼

清掃員の女性

○某所 アフレコスタジオ

カレンダーは1977年6月27日。

アニメ「エレクトリアン・ジョー」の

主人公襟木丈のアフレコをする西野幸

代(18)と敵のアサルト星人の元締め、

アサルトキングのアフレコをする泉健

太郎(20)。

その様子を見る音響監督の河合巧(50)とスタッフA。

泉「フン、小僧が。その尻の青さを悔いるが  
いい」

幸代「何だつて言えアサルトキング。全人類  
の為に僕はやひゅんだ！（やるんだ）」

と噛んでしまう。

幸代、ハツとし、音響監督の方を見て

幸代「すいません」

河合「いや、いい。もうこのまま使う」

幸代「え、でも、最終決戦に向けて大切なシ  
ーンじゃないですか」

河合「アンタらペーパーの劇団員にそん

な凄い演技期待してないし、こんなアニメ

誰も見てないでしょ」

幸代「ご、ごめんなさい」

スタッフA「しかしよくこんな低予算で乗り切りましたよ。スタッフも皆やる気なくて絵コンテが全く繋がってない回とかありましたし」

河合「ま、俺も現場行かずに海行ってた

りボウリング行ったりしたしな」

スタッフB「ちよっと、俺誘われてませんよ、それ」

と河合とスタッフA、笑う。

悲しむ幸代を心配そうに見る泉。

### ○公園（夜）

滑り台で遊んでいる太田忠司（9）

一人でブランコを漕ぐ幸代。

幸代「夢の中で輝く世界。エレクトリアン・

ジョー 世界を駆ける」

と歌う。

その隣に座る泉。

泉「雷のように心揺れて　魔法のリズムで空  
を舞う」

と幸代の続きを歌う。

幸代「泉君」

泉「今日も今日とて夜の公園で反省会ってわけですか」

幸代「ごめん」

泉「あんますぐ謝らない方がいいよ」

幸代「ごめん……ってごめんすぐ謝っちゃつて、あ、また言っちゃった」

泉、大笑い。

泉「はあ、面白い。ま、アンタ上京してまだ一年でアニメの主演取れたんだ。才能はあるんだろうしまたチャンスはやってくる」

幸代「……やっぱり皆、エレクトリアンジョーなんて見てなかったのかな」

泉「ま、それこそ物好きしか見てねーんじやねえの」

幸代「初めての主役で、嬉しくて。頑張るぞ

ってなっていたのに、こんな感じで終わりそ  
うで。ジョーは私にとって大切なヒーロー  
なのに」

泉「じゃあさ、俺たちだけでも覚えていてや  
ろうぜ。ジョーっていうヒーローがいたこ  
と」

幸代、頷く。

泉「電撃の町で 希望の光 闇を払う われ  
らがジョー」

と歌う。

太田、泉と幸代に近づき、

太田「お兄ちゃんたち、何歌ってるの？」

泉と幸代、驚く。

太田「ねー、教えて」

泉と幸代、目を合わせて微笑む。

幸代「この曲はね」

○公園

2024年

太田忠司（56）が鬼の形相で走り、



トイレへ駆け込む。

○公園・公衆男子トイレ

泉幸代（65）、清掃員の格好で現れ、

小便器を掃除。

幸代、誰もいないことを確認し

幸代「夢の中で輝く未来 エレクとリアンジ

ヨー 世界を駆ける」

とエレクトリアンジヨーのop曲を歌う。

個室からうめきながら便をする太田。

幸代驚き、そのうめき声を発する個室を

チラチラ見る。

幸代、ため息をつき淡々と掃除をする。

そこへ青年Bと青年Dが現れる。

青年B、洗面台で手を洗い、髪を

整える。

青年D、スマホでエレクトリアンジヨー

のop曲を流す。

幸代、耳を疑い、青年Dを見る。

青年B「何その曲」

青年<sup>♂</sup>「なーんか昔のアニメなんだけど今話題になってるらしいよ」

青年<sup>♂</sup>「なんで？」

青年<sup>♂</sup>「さあ、なんか変なアニメなんだって」

幸代「(小声で)へ、へン………？」

○同・個室

力みながら便をする太田。

太田「み、見つけた……」

とニヤツとするが

太田「あ、痛ててててて」

○メインタイトル

○泉宅・リビング(夕方)

ソファで寝転がって寝る泉健太郎(67)。

スマホを凝視する幸代。

エレクトリアン・ジョーを動画サイトで検索した結果が現れる。

そこに「太田忠司のオタ語り」というチャンネルの動画が先頭に出る。

幸代、動画群の中から、「【エレクトリアン・ジョー】狂気と正気の狭間で生まれたカオス・カルトアニメ【解説】」という動画を再生する。

○太田宅・スタジオ（動画内）

正面には太田。背景には多くのアニメグッズや漫画がズラリ。

太田「さ、始めました。太田忠司のオタ語り、今日のテーマはずばり、伝説のカルトアニメ、エレクトリアン・ジョー。ま、育ての親である私が解説するのもアレなんですけど」

○泉宅・リビング（夕方）

スマホを見る幸代。

幸代「……育ての親？」

と動画を視聴し続けるがインターホン

が鳴り、視聴を止め、玄関に向かう。

○同・玄関（夕方）

幸代、覗き穴を見ると、宅配業者の格好をする太田。

幸代、太田と気づかず扉を開ける。

太田「こんにちは」

幸代「なんか頼んでましたっけ、私」

太田「ええ、こちらの方を」

とエレクトリアン・ジョーのフィギュ

アを渡す。

幸代「は？」

太田「歌ってください」

幸代「な、何を？」

太田「夢の中で輝く世界」

幸代「え、エレクトリアン・ジョー　空を駆ける」

太田「……やっぱりそうだ。すいません。私、

宅配業者などではありません。これは「縁

結びデリバリー」ってアニメの主人公、犬

井太郎のコスプレで。よく似てるでしょう」

幸代「は、はあ……？ 知らないですし」

太田「気を取り直して。私、こういう者です」

と名刺を渡す。

名刺には「2000のアニメを語る男 太

田忠司」とある。

幸代「太田……あ！ あの、育ての親の」

○同・リビング(夕方)

テーブルで向かい合わせに座る幸代

と、太田。

ソファで寝ている泉。

幸代「えっと、つまり」

太田「ええ、エレクトリアン・ジョーを世に

広めたのは私です」

幸代「どうやって、というかどうして」

太田「ジョーの貴重な円盤、いわばDVDを入

手し無断転載を繰り返しました。探検家た

るもの、見つけた宝物の中身を自慢したい

わけでした」

幸代「探検家って。てか、無断転載なんてダメなんじゃ」

太田「訴える人も会社も今や浄土か奈落のどっちかです。ま、動画サイトのシステムに引っかかって削除と投稿を繰り返して苦労はしましたが」

幸代「貴方はジョーが好きってこと？」

太田「そらそうですよ」

幸代「どんなところが」

太田「私調べによると、一話の予算は衝撃の50万前後。薄給と低いモチベーションに耐えかねたスタッフは仕事をほったらかし海に遊びに。その結果、絵コンテの段階からミスがありまともに繋がってないカットが多数。放送尺も10分と、さらにオープニング、エンディングをそこから除くとたったの五分。しかしその五分の間にヒーローモノの勧善懲悪を落とし込むため、異常なスピード感で殺されまくる敵のアサルト星人」

幸代、太田の語りとうんざりして

幸代「あーもう分かった。要は変なアニメつて言いたいんでしょ。冷やかして私をストーキングまがいなことまでして。警察に呼ばれないだけでも、感謝しなさい」

太田「だが、それでもヒーローを貫いている」

幸代「……え？」

太田「昨今の漫画アニメはやけに露悪的で、勧善懲悪の上っ面だけの逆張りが流行りそれを「リアルだ」などと言って読者視聴者がありがたがり、それを真に受けたなんちゃって創作者どもがさらに糞を垂れ流すようになる。そんな中でエレクトリアンジョーのように勧善懲悪だけが残ったような作品こそが彼らの目を覚まさせるきっかけになるのかもしれないです！」

幸代「えーと、要は、ヒーローとしてのジョーが好きってことですか」

太田「それは先言ったことでしょう」

幸代「えー……」

と困惑し、視線を下げると、テーブルに置かれていたジョーのフィギュアに注目する。

太田「ちなみにあちらのソファにおられる方はご主人ですか？」

幸代「ああ、はい」

太田「劇団微糖座の主宰の泉さんとか？」

幸代「……何で知ってるんですか」

太田「ジョーの声優は○の時に表記されるクレジットが個人名ではなく劇団微糖座表記でしたからね。安い制作費でどうにかしようと旗揚げ直後の劇団にでも目をつけたんですかね。当時は声優という職業も今ほど職業として発達してなかった時代ですか」

幸代「1を聞いたなら10ぐらい答えてきますね……」

太田「サブカル育ちはそういう生き物ですか」

幸代「というかそんな人が今更私に何の用ですか」



太田「私の、太田忠司のオタ語りって動画チャンネルに出てもらいたいんですよ」

幸代「なんで」

太田「盛り上がるからですよ。今やエレクトリアン・ジョーは全盛のネットミームです。最後の花火とばかりに主演の貴方が出てくれば」

幸代「そんなの、私が笑いものになるだけじゃないですか」

太田「まあね」

幸代「まあね、って」

太田「表舞台の味を知ってみませんかミス泉」

幸代「急に馴れ馴れしくならないで」

太田「役者を志す者として憧れたでしょ。有名ってやつに」

幸代「もう帰ってください！」

と太田を追い出そうとする。

太田「劇団微糖座。1977年に主宰の泉健太郎が旗揚げし同年にジョーの声優として劇団員が起用されるもその後大した話題もなく

劇団は「10年後に解散。典型的な鳴かず飛ばずの小劇団のようですね」

幸代「……なんでもご存じで素敵ですね」

太田「そうでもないですよ。物知りというのはたまたま人を傷つけてしまう。今みたいにね」

幸代「……なんなのこの人」

太田「一度諦めた役者人生に再起があるかもしれませんよ」

幸代「……うるさい！」

太田「えー、夜も近いしご一緒にここで夕食でもと思ったのに」

幸代「なんでウチがアンタの分用意する前提なんですか！」

と太田をリビングから追い出す。

○同・玄関（夕方）

幸代、太田を扉を閉めて追い出す。

太田の声「自分のチャンネルにファンからのメッセージもたくさん来てます」

幸代「フアン？」

太田の声「ネット社会がもたらした僥倖ですね。放送当時は可視化されてなかった視聴者の熱が、今は直で来るようになったんですよ。貴方も主演として気になるでしょ。

ジョーがどれほど愛されていたのかを」

幸代「……」

太田の声「じゃ、私はこれで」

扉の郵便受けに何か物が入られる。

幸代、気づき、郵便受けに手を入れると、ジョーのフィギュアと名刺。

幸代、玄関のゴミ箱に名刺とフィギュアを捨てる。

○同・リビング（夕方）

ソファで寝転ぶ泉、目を開けている。

○太田宅・外観（夜）

一戸建ての立派な家。

○同・スタジオ（夜）

動画撮影をしている太田。

太田「それでは今日のオタ語りはここで終わり。それではまた」

と手を振り、カメラの録画を止める。

太田、ため息をつき、パソコンをいじる。

太田「しかし私ってば本当にラッキーボーイだな」

と、パソコンのキーボードを打つ。

太田「ついに、エレクトリアン・ジョーの息の根を止めれるんだから」

パソコンの *word* には大きく「エレクトリアン・ジョー リメイク（仮）第一話」。

○泉宅（朝）

朝食を食べる泉と幸代。

幸代、スマホで太田を検索している。

幸代「アニメ会社の元代表取締役、ね。滅茶苦茶変な人ってわけじゃないのかな」

泉、食べ終わり食器を片付け

泉「ちよつと今日出かけてくるわ」

幸代「あ、そうなの。夕飯は」

泉「済ましてくる」

トリビングを出す。

幸代「えらく急ね……」

とスマホで太田の画像を見る。

×

×

×

回想。

夕方の玄関前で太田を追い出そうとする

幸代。

太田「貴方も主演として気になるでしょ。ジ

ョーがどれほど愛されていたのかを」

×

×

×

幸代「もしかしたら、私たち以外にも、あのアニメの事を好きで、覚えてくれている人がいるのかな」

○同・玄関（朝）

幸代、ゴミ箱から名刺とフィギュアを

取り出し、電話をかける。

○太田宅・外観

立派な一戸建て。

○同・玄関前

幸代、インターホンを鳴らす。

太田の声「チェンジ！ エレクトリアン！」

幸代、ビクツとする。

玄関が開き、エレクトリアン・ジョーのコスプレをした太田が現れる。

幸代「なんのつもりですか」

太田「いや折角主演が来てくれるんだから相應の格好をしなきゃ。凄いでしょこのスーツ。設定資料にあるジョーのスーツを事細かに再現してるの。お陰でちよつとピッチリしてるけど。あ、後レディースもありますよ」

幸代「結構です！ もう帰りますよ」

太田「ああ、失失礼。どうにもサブカル育ちの人間はどうにもサブカルからコミュニケ

ーションを試みるもので。異文化理解交流  
だと思って許してやってください」

幸代「こっちとしてはもう堪忍袋の緒が切れ  
そうですけど」

太田「取り合えずやってみませんか。生配信  
の方を」

幸代「…生？」

○同・スタジオ（夕方）

太田と幸代、カメラの前で両隣で座り  
前にはテーブルとテーブルに置かれて  
いるパソコン。  
背後にはジョーのグッズであふれてい  
る。

幸代「そんな急に生放送だなんて、私全く喋  
れませんよ」

太田「昨日みたいに親しく喋って頂ければ問  
題はありませんよ」

幸代「親しく接した覚えはないんですが」

太田「まあ、もう撮ってますけど」

幸代「は？」

とカメラを見ると赤くランプが光っている。

そしてパソコンの画面は動画サイトが開かれていて、そこには太田と幸代が映り、チャット欄が盛り上がっている。

配信タイトルは「【朗報】襟木丈の声優、

発見【エレクトリアン・ジョー】」

太田「というわけで本日のゲストはアニメ、エレクトリアン・ジョーの襟木丈の声優を務めていらっしやいました、泉幸代様にお越し頂きました」

幸代「あ、えっと」

と困惑するが、咳払いをし

幸代「チェンジ！ エレクトリアン！」

とジョーの声で言った後

幸代「襟木丈を演じさせて頂きました。泉幸代です。宜しくお願いします」

チャット欄が「本物だ」「ガチのジョー

じゃん WWWW」と沸き立つ。



幸代、チャット欄の様子を見て、微笑む。

太田「ジョーの声優の来ていただいたので今日の太田宅はジョー尽くしでございますが」

幸代、多くのグッズや物に圧倒され

幸代「博物館みたい」

太田「半分は自腹、半分はアニメ会社の取締をやった時にぼちぼち譲り受けた品々です」

幸代、ジョーのOP曲のレコードを見つける。

幸代「こんなものまであるの」

太田「凄いでしょ。これ、貴方が歌ってらっしゃるんですよね」

幸代「ああ、なんか合唱団雇うお金も勿体ないからって歌わされたやつですけど」

太田「おお、いいですねそういうエピソード。

この配信見てる人たちはそういうエピソードが大好物だから」

幸代「好物って」

幸代、チャット欄を覗く。

チャット欄には「やっぱり滅茶苦茶低  
予算www」や「でもあの微妙な歌声好  
きなんだよなw」等茶化するようなコメ  
ントが寄せられる。

幸代「び、微妙」

太田「泉さんはジョーのどんところが好き  
ですか」

幸代「えっと、自分が演じたという事もあつ  
てどうしても特別視してしまうのですがや  
っぱり真っすぐにヒーローで、格好良い所  
が好きです」

幸代、チャット欄を覗く。

チャットの更新の勢いが停滞する。

幸代「あれ……？」

太田、咳払いをし

太田「あ、失礼。言葉が足りてなかったです  
ね。カルトアニメとして人気なエレクトリ  
アン・ジョーのどこが好きですか」

幸代「カ、カルト？」

太田「要はヘンテコなアニメということですよ」

幸代「そんなのありませんよ」

太田「じゃあ逆にファンから寄せられた質問に答えて貰っても宜しいですか」

幸代「ファン……！ ハイ！」

太田「ハンドルネーム、しがない消防員さん。

ジョーの声優さん、初めまして。本放送終了から5年経った今でもお元気なそうだなによりです」

幸代、「こちらこそ」というように頭を下げる。

太田「さて、質問なのですが最終話の前の回、64話でジョーがアサルトキングに啖呵を切るセリフが明らかに囁んでいるとファンの間でも話題です」

幸代「え？」

太田「何故リメイクはなさらなかったのでしょうか。それともスタッフのやる気がなかったから、とかでリメイクが出来なかったのでしょうか、ですってハハハ」

幸代「えーと、どんなセリフですかね」

太田「フン、小僧が。その尻の青さを悔いる  
がいい」

とアサルトキングの声真似。

幸代、ハッとし

幸代「なんだって言えアサルトキング。全人  
類の為に僕はやるんだ！……でしたっけ」

太田「おおー。皆さん、<sup>ハ</sup>年越しに甘噛み抜  
きのセリフが聞けましたよ」

と拍手。

チャット欄、「キターーーー」や

「エモすぎ」と盛り上がる。

幸代「こ、こんなんで盛り上がるんですか」

太田「ここのセリフはなぜリテイクなされな  
かったんでしょうか」

幸代「当時の音響監督さんがもうこれでいい、  
って言って撮影が終わってしまっって」

太田「おお、ちなみにその音響監督さん、仕  
事ほったらかして海に行ってたみたいな話  
とあって」

幸代「確かそうだったような」

太田「やっぱり！ ファンの間でも語り草と  
なってる噂の一つですがまさか本当とは」

幸代「ファ、ファン……」

太田「さ、続いての質問です」

と質問を続ける。

幸代、浮かない表情。

○ラーメン屋・店内（夜）

ラーメンを食べつつ、スマホで太田と

幸代の配信を見ている泉。

泉のバッグにエレクトロリアン・ジョー

の台本が入っている。

○太田・スタジオ（夜）

太田と幸代、生配信を続けている。

太田「では、一回休憩を挟ませて頂きます。

続きの配信は20時から、ということでは

それでは」

とパソコンで配信を止め、カメラを切る。

太田「どうでしたか泉さん。ジョーの人気っぷりは」

幸代「あんな人たち、本当にファンなんです。ただ茶化してるだけなんじゃ」

太田「あんな人たちとは心外だなあ。わざわざ貴方を一目見ようと1万人も集まってきたくれたのに」

幸代「あの配信1万人もいたんですか!？」

太田「今どき配信で1万人も集められる人なんて滅多にいません。それほどエレクトロアン・ジョーというアニメが注目されてるんです」

幸代「皆ただバカにしてるだけですよ」

太田「そのの何がいけないんですか」

幸代「はあ？」

太田「昨日私がしていたコスプレのアニメのタイトルと主人公の名前、覚えてますか」

幸代「そんなの覚えてるわけないじゃないですか」

太田「そう、誰もかれも覚えてないんですよ。

たかだかアニメですから。そして僅かな物  
好きが作ったウィキペディアだけがネット  
上に残るだけ」

幸代「覚えててもらえるだけ幸せ、とでも言  
うんですか」

太田「貴方は気に食わないかもしれません。  
ですがこの瞬間、エレクトリアン・ジョー  
はまだ生きているんです」

幸代、押し黙る。

太田、幸代のバッグからジョーのフィ  
ギュアを取り出し

幸代「ちよつと勝手に人の物を」

太田「生きてるんですよ、ジョーは」  
とフィギュアを幸代の顔面に押し付け  
るように見せる。

幸代、距離を取り、ジョーのフィギュ  
アを受け取る。

×

×

×

生配信を再開する太田と幸代。

太田「はい、お待たせしました。第二部とい

うことでね。紹介と前置きは省き早速質問コーナーということで、よろしくお願ひします」

幸代「……よろしくお願ひします」

太田「では早速。ハンドルネーム星の子さん。

初めましてジョーの声優さん。ズバリ、ジョーで一番好きな回はなんでしょうか。お答え頂ければ幸いです」

幸代「好きな回……」

と悩む内に太田と目が合う。

太田、下手なウイנקを連発。

幸代「……えっと、64話です」

太田「64話と言えばさっきの大噛みセリフがあるあの回ですね！」

幸代「ええ、まあ」

とチラッとチャット欄を見る。

チャット欄、「やっぱり声優さんも好き

なんだあの甘噛みセリフwww」

「流石神回64話」と盛り上がる。

幸代、太田からの視線を感じ太田の方



を向く。

太田、小さくグッドポーズ。

幸代、苦笑。

太田「さ、どんどん参りましょう。続いては」

と質問を読み進める。

○泉宅・トイレ（夜）

トイレに座り太田と幸代の配信のアーカイブを見る幸代。

スマホの幸代の声「えっと……64話です」

幸代「こんな媚び媚びな答えをってしまったて。

我ながら情けない」

と、幸代、盛り上がるチャット欄を見る。

幸代「……でもこれで良かったんだよ、きつ

と。今日でジョーとはお別れしよう。うん」

と携帯をしまおうとすると着信音。

相手は太田。

幸代「太田さん？」

と携帯を耳に当て

幸代「はい、泉です」

太田の声「大変ですよ泉さん！ 各所から泉

さんへの依頼が殺到してて、私のところに引

っ切り無しに電話が！」

幸代「……嘘」

○同・リビング（夜）

受話器で電話をしている泉。

○アニメショップ・店内

「エレクトロリアン・ジョー声優 泉幸代

さんサイン会」という看板やポスター。

店内から入口のドアを越えて外まで

続くほどの長蛇の列。

幸代、多くのサインを書く。

客▽、幸代に色紙を渡し

客▽「ここに、全人類のために僕はやひゅん

だ、って書いてください！」

幸代「ハハ……はい」

と苦笑。

○会議場・ホール前

「太田忠司のオタトーク *with* エレクトリアン・ジョー」

という看板。

○同・ホール

太田と幸代、二人で椅子に座りマイクを持ち、喋っている。

多くの客が席につく。

太田「では最後にあのセリフで締めるとしましょう」

幸代「チェーンジ！ エレクトリアン！」

太田「ああ、いやいや違う」

幸代「え？」

太田「では皆さん、せーの」

太田と客達、アサルトキングの声真似をし

太田・客達「その尻の青さを悔いるがいい」

幸代、顔をしかめ

幸代「……全人類のために僕はやひゅんだ」

客達、大いに盛り上がる。

○テレビ局・楽屋前

扉に「泉幸代様」の貼り紙。

○同・楽屋内

幸代、台本を読む。

台本の表紙には「貴方の知らないアニ

メ・ドラマの珍シーン」とタイトル。

幸代、ため息をつく。

扉がノックされる。

幸代「どうぞ」

小森真一（45）が入る。

小森「初めまして、私は番組プロデューサー  
の小森と申します」

幸代「こちらこそ初めまして」

小森「台本はお読みになりましたか」

幸代「ええ。あの囁んだセリフのところ流し  
て、その後に私が音響監督さんがめんどくさ  
がってそのまま使ったって言うんですよね」

小森「そうです！ あの伝説の迷シーンですよ。と言っても迷う方の迷ですよ」

幸代「ああ……はい」

小森「一番の大目玉なので、緊張するでしょうがお願いしますよ！」

幸代「どうも」

小森「ところで泉さん。ジョーをもう一度やってみたいとか思いませんか」

幸代「もう一度？」

小森「実はですね」

と企画書を取り出す。

企画書には「エレクトリアン・ジョー

リメイクアニメ（仮）」とある。

幸代、企画書を手に取り、

幸代「リメイク？」

小森「ジョー人気が全盛の今、泉さん主演のエレクトリアン・ジョーのリメイクをやれば人気は永劫のものになります！」

幸代「私、演技なんて数十年やってないのに」

小森「エレクトリアン・ジョー放映50周年

記念に放映予定ですので、後3年あります。  
その3年でプロの指導を受けて頂き収録に  
臨んで頂く予定です」

幸代「そんな、いいんですか」

小森「ウチの局、ドラマ、バラエティーは好  
調なんですが、アニメがどうしても弱くて  
ですね。ここでジョーのアニメをやって頂  
ければウチとしても救世主、ヒーローにな  
るんですよ」

幸代「ヒーロー……」

と企画書を読み進める。

企画書には「幻のカルトアニメをもう  
一度！」とある。

幸代「カルトアニメって」

小森「やはりジョーで真っ当なヒーローもの  
をやっても面白くありませんからね。脚本  
家にはジョーに理解のある作家から芸人ま  
でを起用する予定です」

幸代、企画書を読み進め、押し黙る。

小森、テーブルの上にあるジョーのフ

イギユアを見つけ

小森「これよく幸代さんが持ち歩かれてるジ

ョーのフィギュアですよね」

とフィギュアに触れようとする。

幸代、小森が触れようとするのを見て

幸代「触らないで！」

と大声を出す。

小森、困惑。

幸代、ハッとし、

幸代「あ、すいません」

小森「今日は収録もありますし、この辺で」

と去ろうとする。

小森「もし興味がおありなら一か月後の正午

ごろにウチの方に来てください。一度試し

にスタジオで実際の台本を使った読み合わ

せをやるので」

幸代「一か月後ですか」

小森「はい。では失礼しました」

と去る。

幸代「もう、どうしろって言うの」

○太田宅・スタジオ（夜）

幸代と電話をする太田。

太田「やればいいんじゃないですか？」

幸代の声「でも、そんな急に」

太田「だから一か月の猶予をくれたんでしょ

うが」

幸代の声「私なんて、素人同然なのに」

太田「たかがおぼさん一人のセカンドライフ

が成功しようが失敗しようが世間は知った

こっちゃないですよ。話題が一週間持てば

お守りが良く効いた方かな」

○テレビ局・入口（夜）

携帯で太田と連絡する幸代。

幸代「そんな目立ちたいわけじゃなくて」

とそこへ泉がやってくる。

幸代、泉に気づき、

幸代「あ、ちよっと切るね」

と電話を切る。



幸代「ごめん、わざわざ車出してくれて」

泉「忙しいんだししょうがないよ」

幸代「ごめんね最近ずっとご飯も作ってあげられなくて」

泉「代わりと言っては何だけどちよつと寄り道しないか」

幸代「え、うん。いいよ」

○コンビニ・駐車場（夜）

泉の車が停まる。

車から泉と幸代が出てくる。

幸代「寄りたいところってコンビニ？」

泉「いや、ここは駐車場代わりだ。行儀が悪  
いけど」

○公園（夜）

泉と幸代、公園にたどりつく。

幸代「公園？」

泉、ブランコに乗る。

泉「夢の中で輝く世界。エレクトリアン・

ジョー 世界を駆ける」

と歌う。

幸代「あなた」

泉「覚えてるか？ アフレコ終わった後、こんな感じの公園で毎回のよう反省会してたの」

幸代「うん、覚えてる」

泉「ある時言ったよな。ジョーは俺たちだけでも覚えててやろうって」

幸代「うん」

泉「ジョーが終わった後、俺たちもっと凄仕事が出来て、もっと凄い役者になれるんだろって信じてた。でも俺たちのキャリアハイはジョーだった」

幸代「うん……」

泉「俺さ、この数十年、ジョーのこと忘れたかったんだよ。お前の目指した夢の果てはあのいい加減なアニメだって言われてるようでさ。でも俺たちが唯一誇れるような仕事もジョーで。色々頭がこんがらがっちゃ

って」

幸代「うん……」

と隣のブランコに座る。

泉「そうやって過ごしてる内にアイツの動画を見つけたんだ」

幸代「あいつって、まさか太田のこと？」

泉、頷き、

泉「そう。あいつのせいでジョーが有名になってるの、実はお前より先に知ってたんだ」

幸代「……そうなんだ」

泉「多分、今のお前って、俺と同じような気持ちを抱えてるんだよな。

ジョーが有名になるのはうれしい、けどなんかイヤっていうか」

幸代「うん、合ってる」

泉「後、もう一個知ってることがある」

幸代「何」

泉「アニメ、やるんだってな。新しく」

幸代「それも知ってるんだ」

泉「うん、家に小森って人から電話が来た」

幸代「ふーん」

泉「どうするんだ」

幸代「どうしようね」

泉「俺たち、なんで役者として成功しなかったと思う？」

幸代「さあ、なんでだろ」

泉「才能がなかったからだよ」

幸代「……もつと手心が欲しかったな」

泉「でも」

幸代、泉の方を振りむく。

泉「お前にはあるんだ」

幸代「どういうこと？」

と笑う。

泉「ジョーを演じる才能が」

幸代の笑顔が消える。

幸代「貴方はどうするの？ 一応やってたじ

ゃん、アサルトキング」

泉「このまま墓に持って帰るよ」

幸代「卑怯だね」

泉「そうね、情けない」

とバッグから64話のエレクトリア

ン・ジョーの台本を取り出す。

泉「だから、せめてお前の手助けはしたい」

幸代「それって、ジョーのアフレコの時に使  
ってた台本」

泉「ずっと持ってたんだ。でもあいつが家に  
来て、怖くなって捨てようとしたけど、捨  
てれなくて」

幸代、台本を手に取り、読む。

泉「一か月の間、これ使って練習してみなよ。

それでじっくり来たら演じてみてもいいと  
思う」

幸代「……ありがとう」

泉「ジョーがいい加減なアニメなんかじゃな  
かったって、俺を信じさせて欲しい」

幸代「うん、頑張るね」

○太田宅・スタジオ

台本を読み、ジョーを演じる幸代。

太田「そろそろ配信やりますよーんって、何

してんの」

幸代「もうちよっと待って」

太田、台本に気づき

太田「え、これガチすか？ ジョーの台本の  
現物じゃないすか。ウヒョー！ とんだプ  
レミア品ですよ」

と台本に触れようとする。

幸代、太田の手をはねのける。

太田「触らせてくれたっていいじゃないすか」

幸代「あ、そうだ。アンタ、アサルトキング  
やって」

太田「あー、キングのコスプレは確か、どこ  
だっけな」

幸代「あー、違う。アサルトキングのこの  
セリフ読んで。練習したいから」

太田、アサルトキングの声真似をし

太田「その尻の青さを悔いるがいい」

幸代「早」

とジョーを演じ

幸代「何とでも言えアサルトキング。全人類

のため、僕はやるんだ！」

○車内（夜）

泉が運転し、幸代が台本を読む。

泉「なあ、もしかしてお前、歌も歌わされたりするのかな」

幸代「え？」

泉「だってジョーのop曲歌ってたじゃん。主演をわざわざお前に据えるくらいなんだからそれくらいしてきそうだなーって」

幸代「あー…」

泉「雷のように心揺れて　魔法のリズムで空を舞う」

幸代、笑い、

幸代「電撃の町で　希望の光　闇を払う　われらがジョー」

○泉宅・寝室（夜）

ベッドで寝ている幸代。

携帯が鳴り、幸代、目が覚める。

相手は太田。

幸代「何よこの時間に。読み合わせ明日だつていうのに」

と電話を繋げる。

幸代「ちよつと、非常識とでも思わないの？  
こんな時間に」

太田の声「チェンジ！ エレクトリアン！」

と太田の声が部屋に響く。

幸代「あ？」

と不機嫌。

太田の声「掛け声はちゃんと言った方がいいですよ、では明日頑張つて」

通話が切られる。

幸代「もう何アイツ」

とため息をつく。

幸代、ベッドから起き、立ち上がる。

幸代「チェンジ！ エレクトリアン！」

と声を響かせる。

幸代、何度も何度も「チェンジ！

エレクトリアン！」と叫ぶ。



そうしている間に日が昇る。

○テレビ局・外観（朝）

○同・女子トイレ個室

便座に座り、台本を読む幸代。

幸代「……流石に緊張するな」

と個室から出る。

○同・女子トイレ

幸代、バッグを持ってスタジオに向か

おうとする。

そこへ清掃員の女性が入る。

幸代、会釈。

清掃員の女性がトイレを掃除する。

幸代、女性を眺める。

○同・会議室・中

幸代、入り、

幸代「失礼します」

そこへ小森が近づく。

小森「お待ちしておりました泉さん。こちら  
台本の方になります」

と新しい台本を渡す。

幸代、台本を受け取る。

小森「では後少ししたら、始めますので」

と幸代から離れる。

幸代、新しい台本を受け取る。

幸代、新しい台本を読む。

幸代「……えっ」

台本のジョーのセリフとト書きが「尺  
の無駄だ、さっさと死ね」と言ってるア  
サルト星人を倒す、や「全人類のため、  
僕はやひゆんだ！」と、盛大に嘔む、  
といった内容。

幸代、小森に駆け寄り、

幸代「あの、何ですかこれ」

小森「生まれ変わったジョーですよ」

幸代「こんなの、ヒーローじゃない」

小森「ヒーロー番組としてエレクトリアン・

ジョーを作ったらつまんないって、言いませ  
んでしたっけ」

幸代「それは」

小森「あ、後ですね。おーい」

と屋敷つかさ（26）を呼ぶ。

つかさ「はい」

と小森と幸代に近づく。

小森「彼女、新アサルトキング役の屋敷さん」

つかさ「初めまして」

幸代「アサルトキングって男なんじゃ」

小森「ギャップってやつですよ。強面宇宙人  
の声帯がキャピジャピした声優さんの声だと  
面白いでしょう？」

幸代「面白いって……」

小森「じゃあ、読み合わせ始めます。泉さん  
と屋敷さんで一回合わせてみてください」

と幸代から離れる。

幸代、新しい台本を握りしめる。

つかさ、新しい台本を持ち、

つかさ「泉さん、ご準備の方、できてます？」

幸代「……はい」

つかさ「じゃあ、始めますね。6 p 開いても  
らってもいいですか」

つかさ、可愛らしい声で

つかさ「お前がエレクトリアン・ジョーか」

幸代、ジョーを演じ

幸代「ああ、そうさ」

つかさ「よくも我々の計画の邪魔をするつもり  
だな？」

幸代、セリフの違和感に気づき小森に

幸代「……あの、日本語おかしくないですか」

小森「おかしいも何も元々のジョーにあった  
セリフだよ。ファンサービスってやつです」

幸代「そうですか」

とあきれ気味。

小森「では、続けて」

幸代「お前たち、アサルト星人を皆殺しにし  
てやる」

とジョーを演じた後

幸代「こんなのヒーローじゃないって」

と、ぼつりとつぶやく。

つかさ「フン、小僧が。その尻の青さを悔  
いるがいい」

幸代、黙る。

台本には「全人類のため、僕はやひゅん  
だ！」とある。

小森「泉さん、どうしました？」

幸代、深呼吸をする。

×

×

×

回想。

夜の公園でブランコに腰掛ける泉と

幸代。

泉「ジョーがいい加減なアニメなんかじゃな  
かったって、俺を信じさせて欲しい」

×

×

×

幸代、ジョーを演じ、

幸代「何だって言え！ アサルトキング！

全人類のために僕はやるんだ！」

と高らかに叫ぶ。

小森、困惑。

小森「あ、そこはあのいつも通り噛んで頂く  
セリフなのですが」

幸代「ちゃんとやらせてください」

小森「ちゃんと、つて」

幸代「あの頃も今もずっと私は本気でした。  
本気で、本気だったんです」

小森「それは我々も同じです」

幸代「ファンサービスだとか、カルトアニメ  
の復活だとか、そういうのが大切なのは分  
かってるんです。そっちの方がジョーを好  
きな人たちを喜ばせられるかもしれません。  
でも、このジョーは私には演じられないで  
す」

小森「考え直してくださいよ。ジョーのリメ  
イクを機に貴方も更に役者や声優の仕事が  
絶対増えるのに。いいんですか？」

幸代「私、ずっと心残りがあったんです。エ  
レクトリアン・ジョーってアニメは本当に  
生きてたのかなって」

小森「作品に生きるも何もないでしょう」

幸代「私、最近のジョーのお仕事を受ける前からずっとジョーの歌を歌ってたんです。ジョーは生きてたんだって無理やり信じ続けるために」

小森「だから、生きるってなんなんですか」

幸代「なんででしょうね」

小森「はあ？」

幸代「人に覚えていてもらえる、愛されても  
らえる作品を、生きているって言うのかも  
しれません。ジョーだってそういう作品な  
のは分かってるんですが、私には今のジョ  
ーがジョーには思えないんです。だから生  
きてるなんて事も思えなくて」

小森「世間が望むジョーの形と貴方が愛した  
ジョーが違った、それだけの話です」

幸代「はい。それだけのために、私にはこの  
ジョーは演じられません」

小森「泉さん！」

幸代、頭を下げる。

幸代「私にはこのジョーは演じられません。」

ごめんなさい」

○車内（夜）

泉が運転し、幸代が後部座席。

泉「で、断ったのか」

幸代「うん、ごめん」

泉「いいよ、お前は守ったんだ、エレクトリ

アン・ジョーを」

幸代「そんな大したことじゃないよ」

泉「世間からすれば俺たちの方がおかしいん

だろうが、だからって間違いじゃない」

幸代「ありがとう」

泉「強い人だよ、アンタは」

幸代「あの時……」

泉「ん？」

幸代「セリフを囁んだ時、ちゃんとやらせて

くださいって言えてればこんなことになら

なかったのかな。こんな愛され方で、ジョ

ーって作品は幸せだったのかな」

泉「作品はモノを言わねえからなあ」



泉、赤信号にギリギリで気づいて車を急停止させる。

その時に幸代のバッグから新しい台本が床に落ちる。

泉「ごめん。危なかった。そろそろ返納かなー、俺も」

新しい台本の最後のページが開かれる。

そこには企画・脚本 太田忠司、と

書かれてある。

幸代、手に取り

幸代「……は？」

○太田宅・スタジオ（夜）

ドンと机を両手で叩く幸代、

太田を睨む。

太田、ただ幸代を見つめる。

幸代、新しい台本の最後のページを開き、

幸代「あんな酷い脚本書いたのがアンタだったなんて」

太田「何なら再アニメ化の話持ちかけたのも私です」

幸代「なんでこんな悪趣味な内容になったわけ？」

太田「殺してやるためです、エレクトリアン・ジョーを」

幸代「殺す？」

太田「今のジョーはコンテンツ的に言えば終末期です。面白いモノに集るつまらない人間が増えすぎた」

幸代「つまらない人間ってどういうこと」

太田「64話の「全人類のために僕はやひゅんだ」だけを知ってジョーを全て知った気になるような連中のこと」

幸代「まあ、よく見たけどそういう人」

太田「私はもっと深いジョーの話がしたくてジョーを広めたのにどいつもこいつもそんな浅はかな連中だった。だからもういっそのこと終わらそうって思いました」

幸代「どうやって」

太田「浅はかな連中に寄せた内容のジョーを作ることです。オリジンの方を天然だとするとこっちは養殖。死骸を無理くり動かしているようなグロテスクなつまらなさで、世間の目を覚ますことによってジョーバブルは崩壊を告げる」

幸代「はあ……」

太田「そんな事を考えていると、運よく私の前に貴方が現れました」

幸代「貴方が私の前に現れたんでしょうが」

太田「貴方にはジョー殺しの片棒を担いでもらいました。つまらない連中につまらないリアクションで返す。それをこなしてくれたのはありがたかったです」

幸代「それ、私を利用したってこと？」

太田「まあそうなりますね」

幸代「そうなりますね、って」

太田「計算外なこともありましたが」

幸代「何よ、それ」

太田「貴方がリメイクのジョーの声優を降り

たことですよ。そのままさっさとつまらないアニメをやってくれれば全て終わったのに」

幸代「……私だってジョーの事が好きだから」

太田「まあ嬉しい誤算でしたが」

幸代「え？」

太田「小さい頃に知ったヒーローを守ってくれるような存在がいたことが嬉しかった。それだけの話ですが」

幸代「小さい頃？」

太田「だから、少し感謝はしてるんですよ、  
貴方には」

幸代、少しの沈黙の後

幸代「ねえ、貴方ってエレクトリアン・ジョーをいつ、どこで知ったの？」

太田「公園で聞こえてきたんですよ、聞いたこともないヒーローの曲が」

幸代「公園……」

太田「名も知らない男女二人が歌っていて、  
何の曲か聞いてみたら、最終回が近いヒー

ローアニメだって。当然その後数話しか見  
れなかったのでジョーのビデオを探しに何  
年も何年も奔走してました」

幸代「……へえ」

太田「思えばジョーを語って楽しかったのは  
あの公園が最初で最後だったのかもしれない  
せん」

幸代「太田さん」

太田「はい？」

幸代「もう一つ計算外なことがありますよ」

太田「は？」

幸代「前にね、トイレで清掃員の人を見たの」

太田「いるでしょ、清掃員くらい」

幸代「私もほんの少し前まで同じことをして  
て、ずっとトイレを掃除しながらジョーの  
曲を歌ってたの。私が掃除するしかジョー  
の居場所はないと思ってた。いつか私が死  
んだら、エレクトリアン・ジョーも死んじ  
やうのかなって思ってたけど、太田さんが  
あの時いてくれたから形はどうで皆の心に

残ったんだなって」

太田「あの時？　どの時ですか」

太田、困惑。

幸代「夢の中で輝く世界　エレクトリアン・

ジョー　世界を駆ける」

と上機嫌に歌う

